

令和 5 年 5 月 21 日現在

機関番号：35412

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02811

研究課題名(和文) 家庭科教育における家庭や地域との連携，協働を促す支援プログラムの開発研究

研究課題名(英文) Research and development of a support program to promote cooperation and collaboration with families and communities in home economics education

研究代表者

梶山 曜子 (KAJIYAMA, Yoko)

広島文化学園大学・学芸学部・講師

研究者番号：50781259

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は同地域にある大学と高等学校とが連携し，家庭科教育の視点から地域の子育てする親と子を対象とした「手仕事」体験プログラムの教材や指導方法を開発し運営実施し，その効果を検証し，一般化を目指した。地域の子育て世代間や異世代との相互交流の場にもなる「手仕事」体験を媒介にした協働的な学びの場を7回実施した。高校生は次世代の親になる視点で，子育て支援への理解が深まり，地域で保育に携わる人材育成につながる可能性が示唆された。子育て世代は，異世代交流や「手仕事」体験を通して，自己肯定感が高まり，孤立感の軽減につながり，地域で主体的に子育てする次世代及び現世代の父親母親の育成に貢献することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

講座に参加した保護者や連携した地域施設の関係者は，手仕事体験が子供の成功体験，創造性や主体性の育成につながり，家庭に帰ってからの遊びの継続，発展や家族のコミュニケーションの促進につながるという教材としての利点と他者との交流が困難なコロナ禍における貴重な異世代交流の場や機会としての利点の2つの視点で意義を見出していた。手仕事体験講座の実践を通して，高校生は子供だけでなく，保護者との交流の意欲・関心が高まり，保護者の子に対する思いや自分達の想像以上の子供の力への気づきが向え，地域で保育に携わる人材育成につながり，コロナ禍で高校生が親と子の手仕事体験講座を実践することの社会的意義が示された。

研究成果の概要(英文)：In this study, a university and a high school in the same area collaborated to develop and implement teaching materials and instructional methods for a "handicraft" experience program for parents and children raising children in the area from the perspective of home economics education, to verify the effectiveness of the program and to generalize it. The program provided a venue for collaborative learning mediated by the "handicraft" experience, which also served as a place for mutual exchange between the child-rearing generations in the community and between different generations, seven times. The child-rearing generation experienced a heightened sense of self-affirmation and reduced isolation through intergenerational exchange and "handicraft" experiences, contributing to the development of the next and current generation of fathers and mothers who will proactively raise their children in the local community.

研究分野：家政教育

キーワード：家庭教育支援 地域連携・協働 家庭科教育 子育て支援 生活技能教育 高等学校 手仕事体験 異世代交流

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

家庭科教育における地域、学校、家庭との連携及び協働の重要性

社会の急激な変化に主体的に対応し、自ら生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を育成することが求められている現在において、家庭生活の価値観や生活様式は多様化し、子どもたちを取り巻く環境にはさまざまな新たな問題が生じてきている。平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申において、“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、学習指導要領等が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、枠組みを改善することなどが求められた。また、高等学校家庭科学習指導要領(平成 30 年告示)解説によると、「高等学校家庭科の教育内容については、少子高齢化等の社会の変化や持続可能な社会の構築、食育の推進等に対応し、男女が協力して主体的に家庭を築いていくことや親の役割と子育て支援などの理解、高齢者の理解、生涯の生活を設計するための意思決定や消費生活や環境に配慮したライフスタイルを確立するための意思決定、健康な食生活の実践、日本の生活文化の継承・創造等に関する学習活動を充実する。また、これらの学習により身に付けた知識・技能を活用して、「ホームプロジェクト」や「学校家庭クラブ活動」等、主体的に取り組む問題解決的な学習を一層充実する。」とあり、親の役割と子育て支援の理解や学校家庭クラブ活動による主体的に問題解決的な学習を行うことが求められている。さらに、家庭や地域社会との連携及び協働や学校間の連携も求められており、地域における世代を超えた交流の機会を設けることが必要である。

高等学校家庭科における家庭や地域との連携した子育て支援プログラムについて

本研究の子育て支援プログラムを検討するにあたり、研究代表者と研究分担者の所属先である広島大学の家庭科教員養成講座と同じ東広島にある西条農業高等学校との連携を計画している。従来の子育て支援は保健師や助産師、保育士などが運営している場合が多く、地域の大学と高等学校が連携して運営するものは見当たらない。また、高等学校家庭科における地域の教育資源を活用したカリキュラムや異世代との交流を取り入れたカリキュラムとしては、多くは高齢者を招いてもてなしたり、保育所に訪問してふれあい体験をしたりといったものがほとんどで、子どもとその保護者のように親子一緒に交流する機会を組み込んだカリキュラムはほとんど見当たらない。本研究では家庭科教育に携わる研究者や実践者が運営に携わるので家庭科教育の視点を取り入れた新しい子育て支援の場を作ることができる。さらに、高等学校と家庭科教員養成大学とが「手仕事」体験講座を媒介にした地域の子育て支援の場の運営することによって、地域の異世代間交流が可能になる。高校生にとっては、次世代の親になる視点で子育て世代と交流することができ、子育て世代は、未来の父親母親になる大学生、高校生に自分たちの経験を親として語ることによって、親自身の自信にもつながると考えられる。

親と子の「手仕事」体験が子育て支援につながる可能性

研究代表者の「幼稚園児をもつ母親の手芸・裁縫活動に対する意識と実態」(梶山ら 2015)の研究では、手芸・裁縫の「嗜好意識」と「実践度」、「子どものための手作り経験」及び「生活の価値意識」に有意な関係性があることが明らかになった。作る相手を思いながら、「手仕事」体験をすることによって、生活の豊かさや価値を問い直す機会を与えることができる。研究分担者の鈴木の研究では、家庭科における「ものづくり」は児童生徒の自己肯定感にもつながることを明らかにしており(鈴木 2011)、親になる父母においても「手仕事」体験を通して、物や材料の働きを理解し、創造する喜びを得、コミュニケーションをとることができるようになれば、育児や家事に主体的に関わる態度の育成につながるのではないかと考える。「手仕事」体験を取り入れることで、日ごろのストレスの解消、物を作る喜びやデザインする喜び、自分の創った作品を大切に使う喜びや達成感など、様々な効果が期待でき、技能習得が可能になるとともに生活の価値意識に気付くことが可能になると考える。日本保育協会による地域における子育て支援報告書(2012)によると、子育て支援に親自身が自信を持つことや、つながることが必要であるとあり、子育て支援に「手仕事」体験を取り入れることでそれらを達成することができると思われる。

## 2. 研究の目的

以上のような背景から本研究の目的は「家庭科教育における家庭や地域との連携・協働を促す支援プログラムの開発をする」とした。本研究の独自性と創造性は 同じ地域にある高等学校と大学が連携・協働して地域の子育て支援プログラムを運営する点、子育て支援プログラムに「手仕事」体験を取り入れる点、高校生と地域の子育て世代などの異世代間交流の場を提供する点、家庭科教育や生活者教育の視点から子育て支援プログラムを運営する点、主体的に子育てする次世代及び現世代の父親母親の育成に貢献する点、「手仕事」体験や「縫うこと」が子育て支援にどう影響を及ぼすか検証する点などである。

### 3. 研究の方法

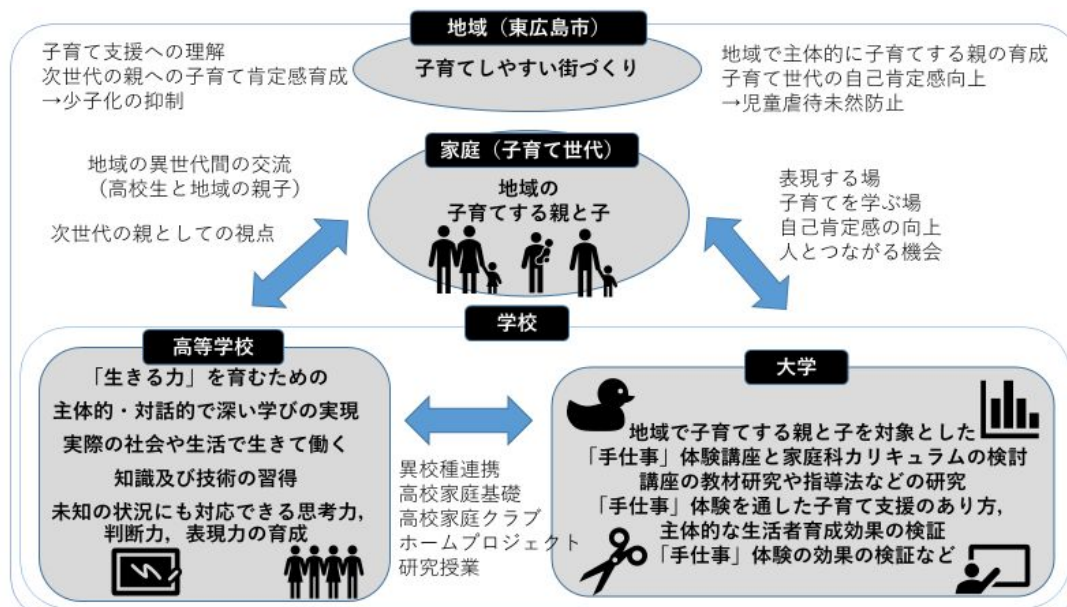


図1 家庭科教育における家庭や地域との連携・協働を促す支援プログラムの全体構想

#### 【2020年度の計画・方法】

既に実施した第1回親子の「手仕事」体験講座～高校生と一緒に作る「背守り」刺繍～で収集したアンケートとこれから実施する第2回講座のアンケート調査の分析を行う。(梶山, 中村 誉子【研究協力者: 現広島県立西条農業高等学校生活科(家庭科)教諭】担当) 調査結果を分析後(梶山担当), 高等学校家庭科と子育て支援につながる「手仕事」体験教材をそれぞれの専門の立場から検討する(家庭科教育の視点から教材・方法の検討: 梶山, 鈴木, 衣生活製作研究の視点から教材・方法の検討: 村上, 子育て支援研究の視点から教材・方法の検討: 正保, 高等学校家庭科ホームプロジェクト研究の視点から教材・方法の検討: 中村, 小学生の発達段階による家庭科題材研究の視点から教材・方法の検討: 竹吉昭人【研究協力者: 現島根大学教育学部附属義務教育学校教諭】担当)。講座名や教材について検討後, 「手仕事」体験講座を実施し, 有効性を検討する。体験講座の有効性を検証するためのアンケート調査やインタビュー調査の調査項目の検討も行う(梶山担当, 全員で検討)。

#### 【2021年度の計画・方法】

前年度に実施した「手仕事」体験講座プログラムを構想(全員)し, 実施する。親子の「手仕事」体験講座の運営は梶山が担当し, 講師や助言者を鈴木, 正保, 村上, が担当する。高等学校との連携は中村が担当する。参加者募集は東広島市の広報担当の協力を得て行う。受講者へのアンケート及びインタビュー調査は梶山が担当する。調査は受講者への受講前後, 高等学校関係, 大学関係に行い, 子育て支援の効果や連携の効果や連携の効果を問う(梶山担当)。

#### 【2022年度の計画・方法】

受講前後の受講者の変容や, 大学, 高等学校関係者へのアンケート及びインタビュー調査を分析し(梶山が担当), 実施したプログラムの効果を検証(全員)する。検証結果は国内外の関連学会(日本家政学会, 家庭科教育学会など)で発表する。東広島市だけではなく, 他地域でも汎用的に実践できるよう, 地域, 家庭との連携及び協働を深める大学と高等学校が運営する子育て支援プログラムとして提案する。

### 4. 研究成果

地域から支える家庭と子どもの生活技能教育プログラムの構想 親子の「背守り」刺繍体験講座の実践から

2019年8月4日(日)と2020年1月5日(日)に「親子の「手仕事」体験講座～高校生と一緒に作る「背守り」刺繍～」と題して, 小学生とその保護者を対象に西条農業高校の生徒13名で実施した。2回の講座の参加者は延べ, 子ども36名, 保護者30名, 高校生31名, 大学関係12名であった。

講座を受講した子どもたちは, 普段家でのお手伝いに対しては「楽しい」や「面白い」など比較的肯定的にとらえていたが, 普段のお手伝いの内容は「食器の配膳」などの食生活関連や「そうじ」などの住生活関連が多かった。保護者アンケートからも同様の結果が得られ, 普段子どもにさせている衣生活関連のお手伝いとしては「洗濯物たたみ」や「洗濯物取り込み」などがあげられていたが, 針と糸を使った裁縫などは行われていなかった。

講座を受講した子どもの感想としては, ほとんどが「楽しかった」「もっとやりたい」など肯定的であった。保護者は, 「集中できてよかった」「子どもと一緒に作ることができてよかった」などほとんどが肯定的な意見であった。2回の両講座に参加した子どもと保護者に第1回受講後

から第 2 回受講までの変化を問うた結果、子どもも保護者も「針と糸を持つ機会が増えた」や「親子で会話が増えた」「家の仕事に興味をもつようになった」などの回答を得た。保護者では「子どもへの思いが強くなった」「家事を積極的にするようになった」などの回答もあり、生活技能教育プログラムを行うことによって、技能習得だけでなく、親子のコミュニケーションを促したり、子育てや家事に前向きになれたりといった効果も期待できることが示唆された。本講座では、地域の高校生にスタッフとして参加してもらうことによる、異世代交流の場を設けることも目的としており、すべての保護者が異世代である高校生と交流できてよかったと回答していた。「普段高校生とは交流がないのでよかった」「大きくなった自分の娘の成長を想像した」などの意見があり、異世代交流による子育て支援の可能性も示唆された。

保護者は学校教育による生活技能の習得に期待をしている一方で生活技能を習得させるのは 5 年生よりも早い方がいいと思っている割合が高かった。また、子どもが興味をもった時に習得させたいと思っている一方で、時間や余裕がないから家では習得する機会がないと思っていた。

以上のことから、学校で家庭科が始まる 5 年生以前に地域でこのようなプログラムがあることの必要性が示唆された。このようなプログラムの効果は、短期間にみることはできないと考えられるので、継続していくことが重要であると考えられる。実践継続のために、地域連携の仕組みを構築していきたいと考える。

高等学校専門科の家庭科における手仕事体験を取り入れたコロナ禍における地域連携・協働の取り組み 高校生と作る「ままごとキッチン」講座の実践から

高等学校専門科における地域人材育成の視点から、「家庭」に関する専門科目において手仕事体験活動を取り入れ、コロナ禍においてその講座を高校生が地域で運営・実施することを通して得られた学習効果について検証を試みた。手仕事体験の教材としては、「ままごとキッチン」を検討し、「家庭」に関する専門科目である 2 年生対象の「子どもの発達と保育」と 3 年生対象の「課題研究」に取り入れた。「ままごとキッチン」教材を「家庭」に関する専門科目に取り入れたことや手仕事体験講座の実践を通して、高校生は子供だけでなく、保護者との交流の意欲・関心が高まり、保護者の子に対する思いや自分達の想像以上の子供の力への気づきが伺え、地域で保育に携わる人材育成につながる可能性が示唆された。

保護者や連携した地域施設の関係者は、「ままごとキッチン」が子供の成功体験、創造性や主体性の育成につながり、家庭に帰ってからの遊びの継続、発展や家族のコミュニケーションの促進につながるという教材としての利点と他者との交流が困難なコロナ禍における貴重な異世代交流の場や機会としての利点の 2 つの視点で意義を見出していた。コロナ禍で高校生が親と子の手仕事体験講座を実践することの有用性が示唆された。

本講座では、父親も参加しやすい教材として「ままごとキッチン」を取り入れたが、期待以上の男性や男児の参加割合増加にはつながらなかった。今後は父親や男児も参加しやすい手仕事教材の工夫や「家庭」に関する科目への効果的な取り入れ方、地域連携や募集の仕方などを更に検討し、継続発展させたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 梶山 曜子、中村 誉子、魏 暎敏、竹吉 昭人、村上 かおり、鈴木 明子	4. 巻 72
2. 論文標題 大学生の手芸・裁縫活動の意識に及ぼす手作り品の受贈経験の影響	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本家政学会誌	6. 最初と最後の頁 218～229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11428/jhej.72.218	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鈴木 明子、梶山 曜子、金崎 悠、平田 道憲、工藤 由貴子、岡 陽子、正保 正恵、佐藤 ゆかり、村上 か おり、松原 主典、高田 宏	4. 巻 2
2. 論文標題 広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討：多様な家政学専門家の意見に照 らした課題と展望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要・教育学研究	6. 最初と最後の頁 124～133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/51671	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 村上 かおり、鈴木 明子、今川 真治、平田 道憲、松原 主典、富永 美穂子、高田 宏、梶山 曜子、金崎 悠	4. 巻 2
2. 論文標題 広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討：人間発達概論の構想と成果およ び家庭科内容構成の展望	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要・教育学研究	6. 最初と最後の頁 115～123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/51620	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 梶山 曜子、中村 誉子、魏 暎敏、竹吉 昭人、正保 正恵、村上 かおり、鈴木 明子	4. 巻 1
2. 論文標題 地域から支える家庭と子どもの生活技能教育プログラムの構想：親と子の「背守り」刺繍体験講座の実践 から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要・教育学研究	6. 最初と最後の頁 588 - 597
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/50242	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 梶山 曜子 , 前田 ひろみ	4. 巻 10
2. 論文標題 高校生を対象とした地域の伝統食材に関する意識調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島文化学園大学学芸学部紀要	6. 最初と最後の頁 13 - 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木 明子 , 金崎 悠 , 村上 かおり , 富永 美穂子 , 松原 主典 , 高田 宏 , 今川 真治 , 梶山 曜子 , 平田 道憲	4. 巻 1
2. 論文標題 広島大学人間生活系コースにおける家庭科教員養成カリキュラムの検討 : 衣・食・住生活概論の構想と成果	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島大学大学院人間社会科学研究科紀要. 教育学研究	6. 最初と最後の頁 136-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/50184	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 梶山曜子 , 森千晴 , 鈴木明子
2. 発表標題 父親の子育て観と子どもの生活技能習得に対する認識 父親の語りの質的分析から
3. 学会等名 日本家政学会第73回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶山曜子, 中村誉子, 魏 曉敏, 竹吉昭人, 村上かおり, 鈴木明子
2. 発表標題 子育て支援のための手仕事体験講座における保護者の変容—異世代交流による「背守り」刺繍の実践を通して—
3. 学会等名 日本家政学会第72回大会 2020年5月31日
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梶山 曜子, 中村 誉子, 魏 曉敏, 竹吉 昭人, 正保 正恵, 村上 かおり, 鈴木 明子
2. 発表標題 家庭や地域との連携・協働を促す高等学校家庭科学習の試み 「背守り」刺繍体験講座への参加実践の成果
3. 学会等名 日本家庭科教育学会2020年度大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 岩田昌太郎 (編)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 協同出版	5. 総ページ数 241
3. 書名 『新・教職課程演習 第21巻』第3節 家庭科	

1. 著者名 日本家庭科教育学会中国地区会編 (正保正恵, 鈴木明子, 村上かおり, 梶山曜子)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 教育図書	5. 総ページ数 135
3. 書名 家庭や地域と連携・協働する家庭科授業: 21世紀型スキルに向き合う	

1. 著者名 日本教科内容学会編 (鈴木明子, 村上かおり, 梶山曜子)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 あいり出版	5. 総ページ数 284
3. 書名 教科内容学に基づく教員養成のための教科内容構成の開発	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 明子  (SUZUKI Akiko)  (90220582)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・教授    (15401)	
研究分担者	正保 正恵  (SHOHO Masae)  (00249583)	福山市立大学・教育学部・教授    (25407)	
研究分担者	村上 かおり  (MURAKAMI Kaori)  (80229955)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・教授    (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関